

お茶うけ 第60話

薩摩焼(1) 400年の歴史

1998年は薩摩焼発祥四百周年の年です。私が11月10日に、鹿児島県日置郡東市来町美山(みやま、元の苗代川)の薩摩焼の陶工第14代沈壽官の家を見学に訪れたときは、10月22日に開幕した「薩摩焼発祥四百周年祭」の幟が道のあちこちに立っており、横断幕にはハングル文字が併記してありました。この家のことを、司馬遼太郎は『街道をゆく 3 肥薩のみち』に、次のように書いています。「苗代川(美山)というこの地は薩摩半島の内陸の低い丘陵地帯にある。- 陶士の村ながら土族村だけに、村の中を走る一筋の道は『桜馬場』と名づけられている。- 沈壽官家の屋敷の門は、薩摩では中ぐらゐの家格の土族門である」。私が訪れた時、その門の柱に「大韓民国名誉総領事館」の大きな表札があり、庭に韓国と日本の国旗が立っていました。



薩摩焼を焼く(陶工の技(わざ))は、朝鮮の李朝陶芸の流れに連なるものです。豊臣秀吉の起こした文録・慶長の役で朝鮮に出兵した九州や長州の各藩主は、日本に引き上げる際に多くの陶工を連れてきました。焼き物で自藩の産業振興を図るためと言われていました。

薩摩藩主島津義弘が3隻の船で連れ帰った80人余りの陶工たちは、400年前の1598年(慶長6年)に薩摩の国の3箇所に別々に上陸しました。串木野市島平に上陸した40人余りが、現在美山に住む人たちの祖先で、上陸した翌年の1599年には、今の串木野市下名北本に窯を開いています。その陶工たちとその子孫は、さまざまな苦難を乗り越え、自らの作陶の技で、また後には京都や瀬戸など各地の新しい技術をも加えて、薩摩の人々の生活と産業に貢献してきました。

薩摩焼には、苗代川系、堅野系、龍門司系の3つの大きな流れがありました。堅野系は薩摩藩主の御用窯で、歴代藩主の支援を受けて薩摩焼の中心的役割を演じてきましたが、1863年の薩英戦争で鹿児島島の城山にあった窯が英国軍艦の砲撃を受け、続く明治維新の廃藩置県などの大改革の中で藩の支援が無くなり窯の火が消えてしまいました。

薩英戦争を含め幕末から明治に移行する日本の激動の時代に、横浜のイギリス公使館の書記官として大活躍をしたアーネスト・サトー(Sir. Ernest Mason Satow)は、純粋のイギリス人で、すぐれた外交官であると同時に、言語学者、美術評論家、旅行家で著述家でした。サトーは明治になってから薩摩を2度訪れています。1877年(明治10年)2月の始めに苗代川(美山)に泊り、薩摩焼を見聞したサトーは、翌年「日本アジア協会」で「薩摩に於ける朝鮮陶工たち」と題して講演しました。「日本のやきもの 薩摩」の本に、その講演草稿の要約がありますが、サトーは歴史について、「歴史の流れは、ときとしては陽光のなかにさざめき、ある時は伏流となって暗く沈潜しながら、次の変化を求めて移動してゆく」と書き、また「苗代川の人を支えている高い誇りと、伝承される美しい陶器は、この人達の未来を輝かしいものにすることを信じて疑わない」と記しています。ちょうど、2月15日に西南戦争が始まる寸前の時期で、薩摩藩全体が緊迫した状態であったためか、苗代川から鹿児島への帰り道で、サトーが西郷隆盛派の私学校の生徒たちに一時逮捕されるというハプニングもありました。

美山の苗代川系の陶工たちにも、時代の厳しい試練がありました。廃藩置県で薩摩藩からの支援はなくなり、藩窯は県の陶器会社の所有となりました。次いで起こった西南戦争で、若い陶工たちは西郷隆盛の軍に志願して戦いましたが、敗れて多くの命が失われました。そのため陶器会社は解散となり、陶工たちは生計の道を絶たれました。この時期に、第12代沈壽官は、陶器の製造を独立自営の形で行って苗代川を再興することに全力で取り組みました。多くの陶工たちが、それに賛同して作陶に励んだので、サトーの予測どおり苗代川系は再び隆盛の方向に進むことができたのです。

11月28日と29日に、日韓初の閣僚懇談会が鹿児島で開催されました。懇談会終了後、美山の沈壽官の家を訪れた小淵首相と韓国の金鐘秘首相や両国の閣僚などは、揮毫を楽しみ、日韓の両大使は仕事場でろくろを回すなどして親善を深めました。これには長年にわたって、民間レベルで日韓の友好と相互理解に努めた韓国名誉総領事の第14代沈壽官の働きがあったと思いますが、また同時に目に見えない歴史の深い流れが感じられました。

以上

参考文献:

『街道をゆく 3 陸奥のみち、肥薩のみちほか』 司馬遼太郎著 朝日文芸文庫

『日本のやきもの 薩摩』 沈壽官・久松良城著 (株)淡交社刊

薩摩焼発祥四百周年「かごしまの窯元めぐり」 南日本新聞開発センター編・刊